

アメリカにおけるヴェノナ文書の公開（1995年）と 国内反共主義論争

— ポスト冷戦期のアメリカの政治文化との関連性を中心に —

佐々木 豊

〈Summary〉

This essay analyzes the debate over the historical assessment of domestic communism and anti-communism (commonly dubbed as McCarthyism) triggered by the declassification in 1995 of the Venona Files, a partial decryption of some 3,000 Soviet intelligence messages intercepted by U.S. counterintelligence agencies in the immediate years before and after World War II. The Venona Files have clearly revealed that there existed extensive Soviet spy networks engaging in espionage with the cooperation of American collaborators, some of whom were high-ranking officials in the U.S. government. Since the release of the Venona Files, several controversial works on the Communist Party of the United States (CPUSA) as well as on McCarthyism and Senator Joseph McCarthy have been published, mostly by conservative historians. They have made extensive use of the files in their works, arguing that CPUSA had been the pawn of the Komintern and that there was substantial truth to what McCarthy said about the threat of domestic communism. On the other hand, historians and journalists of left-liberal persuasion have countered such assertions by questioning the validity of evidence deriving from the Venona Files and also by arguing that the threat posed by domestic communism and espionage activities of Soviet agents and their American collaborators was not as serious as their conservative counterparts have suggested. While tracing the representative discourse by both sides of this debate in the context of the Post-Cold War era, the essay suggests that the whole contour of the debate has revealed the quintessential political culture of the United States, i.e., counter-subversive tradition associated with the fear of “the other” and anti-intellectualism.

はじめに

1995年7月、第二次世界大戦中から1970年代に至るまでソ連の諜報機関がアメリカ国内で行ったスパイ活動の暗号文を解読した文書（通称ヴェノナ文書）がアメリカ国家安全保障局（National Security Agency, 以下NSAと略記）によって公開された¹⁾。興味深いことに、それまでアメリカ政府のトップシークレット扱いであったこの文書の公開を契機として、1940年代後半から1950年代前半にかけてアメリカ社会で猛威を振るった扇動的な国内反共主義（通称“赤狩り”又は“マッカーシズム”）及びアメリカ共産党研究を中心とする国内共産主義に対する評価をめぐって、保守派とリベラル派の間で激しい論争が巻き起こった。

本稿は、ヴェノナ文書公開によって惹起されたアメリカ国内における上記のような論争の経緯

と内容に関して分析と考察を加えることを主たる目的とする。その際、この文書や旧ソ連側の資料を利用して著されたアメリカ共産党研究や国内反共主義を扱った諸研究の評価をめぐって保守派とリベラル派の歴史家／有識者の間で行われた論争の内容を分析することを通じて、両者の間のイデオロギ的角逐の内容に関して検討を加える。さらにこの論争を手がかりとして、ポスト冷戦期のアメリカの政治文化の様相に関して考察を及ぼしてみることにはしたい。

I. ヴェノナ文書とは？ — その概略と公開の経緯

まず最初にヴェノナ文書の概要に関して、この文書の作成元となったアメリカ陸軍諜報部による作戦（ヴェノナ作戦）の発端から経過を説明したNSAによる公刊物やインターネット上のサイトに載せられている解説に基づき説明することにはしたい。

“ヴェノナ”とは、第二次世界大戦中の1943年、アメリカ陸軍通信隊（the U.S. Army's Signal Intelligence Service, NSAの前身）の暗号解読班によって1943年に始められた作戦のコードネームを指す。この作戦の目的は、ニューヨーク／ワシントンのソ連の在外公館（大使館及び領事館）や通商代表部に配置されたKGB（ソ連国家保安委員会）及びGRU（ソ連陸軍諜報部）に所属する部員から打電された外交公電を傍受して解読すると同時に、アメリカ国内でスパイ活動に従事しているソ連の諜報員および米国人協力者を特定することによって、ソ連のスパイ網を暴くことにあった。当時、ソ連の諜報機関は用途別に5種類の暗号システムを使用し、その複雑さゆえに当初は解読作業が難航するものの、解読班は1946年夏辺りから一部の通信文の解読に成功し始めた。また、1947年夏以降は、連邦捜査局（FBI）の職員が陸軍通信隊に配属されてヴェノナ作戦に参加し、以後FBIの協力の下にこの極秘作戦が実行された。FBIと比較的早い段階から協力関係が結ばれたのは、次のような理由による。すなわち、外交公電の暗号文が解読されても、そこに登場する名前にはすべて暗号名（コードネーム）が使われていたので、それを実在の人物と照合する作業が必要になってくるが、そのためには、すでに1930年代後半から共産黨員を含む左翼主義者の素行調査を行っていたエドガー・J・フーバー（John Edgar Hoover）長官率いるFBIが保有するファイル資料や捜査ノウハウを利用することが必要不可欠であったからであった²⁾。

結局、この解読作業は1980年に終了するまで40年間余り続けられるが、この間、モスクワとアメリカ国内の間でやりとりされた外交公電中、解読に成功したのはごく一部であった。他方、解読されたのは主に第二次世界大戦中から戦後初期を中心とする2,900通あまりの外交公電（総計約5,000頁）であったが、その結果明らかになったのは、ソ連のスパイネットワークによるアメリカ国内における大規模な諜報活動の存在であった。すなわち1930年代後半から第二次世界大戦中にかけて、ニューヨーク／ワシントンにソ連のスパイ網が現実に幾つか存在し、それらには、1919年に設立され、ニューディール時代（1930年代）に政治勢力として存在感を示したアメリカ共産党（The Communist Party of the United States of America, 以下CPUSAと略記）の黨員を多数含む数百人のアメリカ人協力者がいたこと、また解読された外交公電の中には、大戦中

の原爆開発計画に関する諜報活動やアメリカ政府高官のスパイ活動を示唆するものも含まれるなど（これらの点に関しては後述）、極めてセンセーショナルな内容を有するものとなった³⁾。

次に、ヴェノナ文書がポスト冷戦期の1990年代半ばに公開された経緯についてみてみたい。

同文書公開の最大の功労者は、民主党の大物政治家として知られたダニエル・モイニハン（Daniel Moynihan）上院議員であった⁴⁾。モイニハン議員は「アメリカ政府は冷戦期、なぜソ連の経済力や軍事力を過大評価してその評価を誤ったのか」という問題意識からアメリカ政府の対外情報収集体制に関心を寄せる一方、冷戦が終わったことに鑑み、冷戦中に行われたアメリカ政府による防諜／対諜報活動に関する機密保持や情報秘匿の体制は大幅に見直されるべきであるという信念を抱いて、米国議会下院に政府機関による対ソ情報収集活動を調査する「政府機密の保全と公開に関する特別調査委員会（The Commission on Protecting and Reducing Government Secrecy）」を1995年に設立して自らその委員長に就いた。同委員会は聴聞会開催を通じた関係者からの証言採取を含む二年あまりの調査活動を経た後、1997年3月に米国議会に最終報告書を提出するが、その中で、機密保持と公開のメリット／デメリットの均衡を図ることの難しさを指摘しつつも、従来、諜報機関が官僚的メンタリティーに基づく“秘密主義の文化”、即ち機密情報を組織の財産とみなし、他の政府機関と共有しようとしめない文化が蔓延していることに鑑み、機密文書の公開および機密維持に関しては制定法による規制を行うべきである、という勧告を行っている⁵⁾。またモイニハン議員はこの委員会の活動中、ヴェノナ作戦の存在を知ることになり、委員会の権威を用いてNSAに働きかけてその公開を促した。一方、NSAの関係者の間でも、ポスト冷戦期、ソ連が消滅して諜報機関の存在意義が問われる中、成功裡に解読した過去の機密文書を公開することによって国家安全保障に対する諜報機関の貢献を一般社会に知らしめるPR活動を行うことが得策であるという判断も働き、公開に同意したという事情もあった⁶⁾。

ところで、モイニハンはこの委員会での活動の経験を元に、アメリカ政府の対諜報活動を批判的に分析した著書を1998年に著し、その中で興味深い事実と論点を幾つか紹介している。例えば、陸軍の上層部は、秘密主義や“組織の財産”というセクショナリズムに捉われていたこと、またこの暗号解読作業自体の機密性を維持する必要性から、他の政府機関のみならずハリー・トルーマン大統領を含む政府要人にもヴェノナ作戦の成果の詳細を逐次報告していなかったことを指摘している。そしてモイニハンは、ヴェノナ文書の存在が当時から政府関係者に広く共有されていれば、アメリカ国内におけるソ連の諜報活動の脅威の実態に関してより冷静な判断・対応を可能にし、当時の“赤狩り”の代名詞となっているジョセフ・マッカーシー（Joseph McCarthy）上院議員のようなデマゴーギーによる無責任な“赤の脅威”の告発の余地をむしろ狭めたであろう、と指摘した。また、当時、ソ連のスパイとして告発された国務省高官アルジャー・ヒス（Alger Hiss）に対する裁判（後述）の際にみられたような反共主義派と反・反共主義派の間で二極分解して行われた世論を二分する党派的論争も起こらなかったのではないのか、という推論も行っている⁷⁾。

ここで特に興味が引かれるのは、モイニハンがリベラル派が主導した反-反共主義（anti-anti-

Communism)も批判していることであろう。すなわち、モイニハンは当時ソ連のエージェントがワシントン、ニューヨークで実際に暗躍し、国内共産主義の脅威が現実のものとして存在したことに鑑み、リベラル勢力が当時の反共主義を“無実の人間に対する‘魔女狩り’に他ならない”と主張したことはマッカーシーと逆の意味で行き過ぎであった、という評価を行っている点である。総じてモイニハンは、ヴェノナ文書が明らかにしたように当時のアメリカにおいて“共産主義者の陰謀”は現実に存在した一方、政府がその脅威に関して適切な情報公開を行わなかったために国内政治に無用の混乱をもたらしたと論じ、政府の諜報機関は国益にマイナスにならない形で適宜、諜報活動の成果を一般に公開すべきであると主張した⁸⁾。

II. ヴェノナ文書が明らかにしたソ連のスパイ／協力者たち

この節では、ヴェノナ文書によって明らかにされたソ連の諜報活動に対するアメリカ人協力者たちに関して検討する。

既述のようにヴェノナ作戦により、1930年後半から第二次世界大戦を挟んだ戦後初期にソ連のKGB／GRUが張り巡らしたスパイネットワークが、ニューヨーク、ワシントンを拠点として極秘の活動を行っていたことが明らかにされたが、これらのソ連の諜報機関によるスパイ活動に協力していたアメリカ人は数百名にのぼり、その中には、CPUSA書記長アール・ブラウダー(Earl Browder)を含む党中枢指導部や地下組織のメンバーが多く含まれていた。また正式の共産党員ではなかったものの、ソ連に情報を提供していた親ソ派の政府関係者が何人かいたことも判明している。

他方、CPUSA党員を中心とするアメリカ人協力者の実数に関しては、大凡数百名いたとされる一方、その正確な数に関しては確証されていない。実際、NSAの説明では、「ヴェノナの解読文書の中で、数百名の氏名／匿名が見出され、KGBまたはGRUのメッセージの中で秘密の“財産”或いは“接触者”として言及されている。これらの人物たちの中、多くが特定されている一方、多くは特定されていない。…KGBはCPUSAと広範に接触していた」となっている⁹⁾。このように、NSAの文書では当時アメリカに住んでいた数百名の人物がアメリカ国内におけるソ連の諜報活動に協力していたことを示唆しつつも、曖昧な記述に終始し具体的な数字や特定された人物たちの氏名は公表されていない。但し、多くのCPUSA党員が含まれていたことは強調されている。

より具体的な数字は、ヴェノナ文書を主な資料・題材として使用して著された研究書『ヴェノナ：アメリカにおけるソヴィエトの諜報活動の解読』（1999年刊）の著者であるアメリカ現代史研究者ジョン・E・ヘインズ(John Earl Haynes)とハーヴェイ・クレア(Harvey Klehr)によって挙げられている。彼らによれば、解読された通信文によって349人の「ソ連の諜報機関と秘密裏に関係をもったアメリカ人およびアメリカ居住者」が浮かび上がり、さらにその中171名が実名で特定された¹⁰⁾。なお、この二人の研究者は、ヴェノナ文書公開前、前述したモイニハン委員会の聴聞会において証言を行い、モスクワの公文書館における自らの資料収集体験に基づき、

ヴェノナ文書の存在を示唆していた。いずれにせよ、彼らは CPUSA 研究を含む国内反共主義研究の保守派を代表する歴史家たちであり、後で説明する国内反共主義をめぐるリベラル派との論争においても中心的役割を果たすことになる¹¹⁾。

CPUSA 党員の他に、ヴェノナ文書によって明らかにされたアメリカ人スパイの中で特に注目されるのは、F. ローズヴェルト政権／トルーマン政権双方に跨る時期にアメリカ政府諸機関（財務省、国務省、戦時工業生産委員会、外交経済局など）の中で働いていた数名の人物である。それらの人物の中で“政府高官”と呼べるのは、具体的には、ハリー・デクスター・ホワイト（Harry Dexter White, 財務次官補、国際連合設立のためのサンフランシスコ会議におけるアメリカ政府の上級アドバイザー、1946年国際通貨基金米国代表理事、財務長官モーゲンソーの右腕といわれた人物）、ロークリン・カリー（Lauchlin Currie, 元カナダ国籍、ハーバード大学 Ph.D., 財務省調査統計部、経済および中国問題担当の大統領上級行政職補佐官 [1939～1945]、国民政府派遣政府使節団団長 [1942]、1958年にボリビアに亡命）、フランク・コー（Frank Coe, 財務省通貨調査部部長、海外経済局理事、1958年に中国に永住）、およびローレンス・ダガン（Laurence Duggan, 国務省南米課課長、大戦後は国連救援復興機関所属）であった。最後に挙げたダガンを除いてすべて財務省における職務に携わっているが、いずれにせよ彼らはワシントンの政府機関中枢におけるソ連のスパイネットワークの構成員であったことがほぼ確認されている¹²⁾。

ところで、ヴェノナ文書で特定された“政府中枢に潜入したアメリカ人スパイ”として、当時からもっともアメリカ社会の耳目を集めたのが、国務省高官アルジャー・ヒス（Alger Hiss）であった。ヒスはハーバード大学法律大学院出のインテリで、1930年代後半は国務省極東課でスタンレー・ホーンベック（Stanley Hornbeck）課長のアシスタントを務め、1945年には国務長官上級補佐官として、ヤルタ会談における米国代表団随行員となり、また戦後は国連外交を担当する国務省の「特別政治問題局」の責任者も務めている。ヒスは、1940年代後半に、アメリカ共産党を含む左翼団体／主義者の活動を調査するために連邦下院に設置された「非米活動委員会（The House Un-American Committee, HUAC）」の場で、元 CPUSA 幹部ウイトカー・チェンバース（Whittaker Chambers）によるスパイ告発を受けて証言に立ち、自らにかけられた嫌疑を否定するものの、結局偽証罪で5年の禁固刑の判決を受けている¹³⁾。ヴェノナ文書の中では、ヒスは“Ales”というコードネームの下、ヤルタ会談の後、モスクワを訪れ、ソ連側と接触したことを示す公電が残されている¹⁴⁾（資料1参照）。

このヒス事件と並んで、或いはそれ以上にヴェノナ文書によって明らかにされたアメリカ国内で起きたスパイ活動で最も衝撃的な（そしてアメリカの国益の観点からして最もダメージが大きかった）ものは、ジュリアス・ローゼンバーグ（Julius Rosenberg）／エセル・ローゼンバーグ（Ethel Rosenberg）夫妻によるアメリカ政府の原爆製造計画（通称マンハッタン計画）に対するスパイ活動であった。ローゼンバーグ夫妻は、第二次世界大戦中、米国ニューメキシコ州ロス・アラモスの国立研究所で行われたマンハッタン計画に参加したイギリス人物理学者クラウス・

フックス（Klaus Fuchs）がソ連のスパイとして逮捕された後、この人物の自白を契機として共犯者として逮捕され、原爆開発の機密をソ連に漏洩した罪（いわゆる“atomic espionage”の罪）で1951年に死刑判決を受けた。この判決に対してアインシュタイン（Albert Einstein）を含む各国の著名有識者による助命嘆願運動が起こったが、折しも朝鮮戦争の勃発やマッカーシー旋風によって国内で反共主義的風潮が高まる中、結局1953年に夫妻に死刑が執行された。このローゼンバーグ裁判は、アメリカ国内でも当時「ローゼンバーグ論争」として大きな反響を呼び起こし、夫妻の無罪を信じたリベラル派は、夫妻は“赤狩り”の“殉教者”であると主張して、刑執行後も、言論を通じて夫妻の無罪を訴え続けた。またこの事件を扱った研究書は1960年代～80年代においても出版されるなど、後生にも余波を与え続けた事件となった¹⁵⁾。この裁判が行われた当時、ヴェノナ文書からの証拠は検察によって提出されなかった一方、ヴェノナ文書の中の公電の一つが、少なくとも夫のジュリアスが“Liberal”というコードネームを持つ“atomic espionage”の頭目の一人であったことを示した信憑性のある状況証拠として広く認められている（資料2参照）。その結果、今日では少なくともジュリアス・ローゼンバーグの無罪を信じる者はかつての擁護派を含めていなくなっている。

なお、ヘインズとクレアの研究によれば、アメリカ人協力者によってソ連側にもたらされたのは、原爆製造に関する機密の他に、第二次大戦中のアメリカの航空機生産量と配置、航空機搭乗員の訓練と配備に関する覚書、米政府のポーランドの処遇に対する基本姿勢をめぐる文書、対ドイツ占領政策に関する文書、戦時下の英米間のレンドリース交渉をめぐる情報、国連設立に向けたサンフランシスコ会議におけるアメリカの方針／交渉戦略に関する情報、などであった¹⁶⁾。

Ⅲ. ヴェノナ文書と国内共産主義／反共主義研究の新動向

ポスト冷戦期に入ると、ソ連側の外交文書に対する西側研究者のアクセスがある程度可能になったこと、またヴェノナ文書を初めとする新しい資料の公開によって、それらを一次資料として使用して著された研究が相次いで公刊された。そのような研究に刺激されて、アメリカ現代史研究者の間で、冷戦初期の反共主義の評価を巡って大きな論争が巻き起こった。論争は大別して、CPUSA研究と国内反共主義（“赤狩り”）及びその一部としてのマッカーシズムの評価、そしてマッカーシー上院議員自身に対する再評価に関わるものである。以下では、これらのトピックを巡る研究状況と論争の内容に関して順に検討を加えてみたい。

まずCPUSA研究、国内反共主義（“赤狩り”）研究では、前述したヘインズおよびクレアという、アメリカ現代史を専門とする二人の保守派研究者による著作が代表的なものとなっている。彼らの研究の特色は、ソ連崩壊後の1990年代前半、情報公開の機運に乗じてモスクワの国立文書館でコミンテルン関係の資料調査をいち早く行い、そこで閲覧したCPUSAファイルに基づき、コミンテルンとCPUSAの間の密接な関係を描いたことにある。さらにその後も、アメリカで公開されたヴェノナ文書も利用して、ソ連の元KGB職員と共同でCPUSAとソ連の諜報機関との緊密な関係を実証的に論じた著書を公刊するなど精力的に研究成果を発表し、彼らの研究はアメ

リカ現代史研究者の間で大きな反響を呼び起こした¹⁷⁾。

CPUSA 研究史を紐解くと、最初期（1950年代）の研究においてはモスクワのコミンテルン本部に忠実で厳格な指揮系統を持つレーニン／スターリン主義を標榜する権威主義的独裁政党として描かれていたものの、特に1980年代以降に入ると、CPUSAがアメリカの政治状況に適應した革新的な左翼政党として、その活動を民衆史的な視点から高く評価する研究が登場した。その代表がイッサーマン（Maurice Isserman）の研究であり、ここではCPUSAは、1930年代のニューディール期にファシズムに対抗する“人民戦線”運動に参加したことに象徴されたように社会改革を指向する改良主義政党として脱皮し、特に各地方レベルでアメリカの労働大衆の権利獲得／生活向上に、また黒人労働民衆を含む各人種／民族集団の市民権の擁護に尽力した穏健な左翼政党として描かれた¹⁸⁾。同様の“進歩的改革政党”というCPUSA像はアメリカ史学会の重鎮の一人であるコロンビア大学歴史学部教授フォナー（Eric Foner）の著作においても提示され、CPUSAの活動は、アメリカ的自由の境界を拡大しつつ再定義した革新的な知的／文化的運動の旗手という肯定的な評価を下された¹⁹⁾。

このようなCPUSA像に根本的な修正を迫ったのがヘインズとクレアのCPUSA研究である。彼らの研究によれば、CPUSAは、設立当初から一貫してソ連の道具・手先であり、その幹部は、モスクワのソ連共産党本部の指示に従って、1930年代から組織的にソ連のアメリカ国内におけるスパイ活動を幫助しており、まさに“内部の敵”として、アメリカの国益に重大な損害を与えたという修正主義的なCPUSA像を提示した。より具体的には、彼らの著作においてはヴェノナによって解読された通信文を資料として使いつつ、1930年代から1940年代にかけて、CPUSA 党員またはそのシンパからなる五百名以上のアメリカ人が国務省や財務省を含む政府省庁に潜入してソ連のスパイ活動を幫助していたと論じた。ヘインズとクレアは、最も成功した諜報活動は原爆製造計画であるマンハッタン・プロジェクトに対するスパイ活動であることを特に指摘し、これによってソ連は、通常よりも何年もはやく原爆開発を行うことができたと主張している²⁰⁾。

興味深いことに、ヴェノナ文書の公開によって活性化された国内反共主義研究は、アメリカ現代史の大きな汚点の一つと見なされ続けてきたマッカーシズムおよびマッカーシー自身を再評価する研究やジャーナリスティックな記事の公刊を促した。ここではその中でも代表的な二つの伝記的研究に関して言及しておく。一つは、保守系シンクタンクとして知られるアメリカン・エンタープライズ協会の研究員を務める現代史家ハーマン（Arthur Herman）の研究である。この著作においてハーマンは、1950年2月のウエスト・ヴァージニア州ウィーリングの共和党女性クラブにおける“国務省内に205人の共産党員がおり、そのリストを所有している”と述べた演説に端を発するマッカーシーの反共キャンペーンの戦術の行き過ぎは認めつつも、彼の告発の内容に関しては十分に正当性があり、アメリカ国内の中枢にまで潜入した共産主義者の脅威という彼の告発内容の正しさについては基本的に承認できるものとした。さらにハーマンは、民主党系の冷戦リベラル派たちによって、いまだにマッカーシーは嫌悪や不名誉の対象とされているが、マッカーシーはスターリン時代の秘密裁判の犠牲者にも比すべきアメリカのリベラル・エスタブ

リッシュメントによる反-反共主義の犠牲者であること、そして“悪の権化”というリベラル派によるマッカーシー像は全く不公正なものであり、その名誉回復が図られるべきであると主張した²¹⁾。

ハーマン以上に当時の国内共産主義の脅威に対するマッカーシーの主張の正しさを全面的に肯定して擁護した著作は、エヴァンズ (Stanton Evans) によるマッカーシー研究である。この著作においてエヴァンズは、F. ローズベルト／トルーマン両政権に潜入した親共産主義者がアメリカの外交政策を操り、世界における共産主義の伸長を手助けしたと断定し、マッカーシー流の“陰謀説”に全面的に与した。特にアメリカ政府の対極東政策に関しては、F. ローズベルト大統領に任命されて国民政府の蒋介石の政治顧問に一時期就任した内陸アジア研究者オーウエン・ラティモア (Owen Lattimore) やコロンビア大学国際法教授で国務省顧問に就いたフィリップ・ジェッサップ (Philip Jessup) を名指しで取り上げて批判の俎上に載せた点が注目される。すなわち、エヴァンズはこの二人の人物を“ソ連のスパイ”とまで断定はしなかったものの、国務省とのコネクションや影響力を利用して両政権の対極東政策を中国共産党に有利な方向に誘導して“中国喪失”を招いた張本人たちとして非難した²²⁾。

ところでここで興味深いのは、エヴァンズの経歴である。エヴァンズは戦後アメリカの保守主義の大立者ウィリアム・バックリー (William F. Buckley) が発刊したアメリカ保守主義の代表的な論壇誌『ナショナル・レビュー (National Review)』の副編集長をバックリー編集長の下で長らく務めていた。バックリーはマッカーシズムと同時代に、当時ではごく稀なマッカーシーを擁護する著作を著しているが²³⁾、エヴァンズはバックリーに極めて近い人物であったことから、穿った見方をすれば、いわば“師匠”の衣鉢を継いでこの著作を著したものともみなされよう。

このような“the McCarthy rehabilitation literature”とでも性格づけられる書籍の発刊に勢いづいて、アメリカの右翼／保守主義者は、マッカーシズムの正当性やマッカーシー上員議員の名誉回復を主張する言論を発表している。例えば、保守の論客として知られるフリン (Daniel J. Flynn) は、ハーマンの著作を評した論考において、マッカーシーは共産主義者をまさに彼らがそうであったところのもの——共産主義者——であったことを告発した“罪”でリベラル派に弾劾されていると皮肉をこめて述べ、ハーマンの著作は「マッカーシーを悪鬼に仕立て上げたプロバガンダ的長談義に対する解毒剤のようなもの」と呼んで賞賛した²⁴⁾。また共和党保守派の大将ブキャナン (Pat Buchanan) は、未だにリベラルは“マッカーシーの死体を掘り起こして鞭打っている”と非難しつつ、ヴェノナ作戦によって1940年代の民主党政権には共産主義者のソ連のスパイが忍び込んでいたことが証明され、“マッカーシーだけが、ヨーロッパの半分をスターリンに明け渡し、毛沢東の殺人集団に中国全土を明け渡した裏切りと愚かさを暴いた”と指摘して、マッカーシーの行動の再評価を促した²⁵⁾。さらに超保守の論客として知られるアン・コトラー (Ann Coulter) も、エヴァンズの著作に対しては“聖書以来、最も偉大な本”と大仰な賛辞を呈する一方、ヴェノナ文書からの証拠を引用しながら、共産主義の陰謀／脅威を勇気をもって正當に告発したマッカーシーこそアメリカにとって“必要欠くべからざる人物”であったのであり、

侮蔑的な“マッカーシズム”の諜報人というリベラルが着せた汚名からその名誉が回復されるべきである主張した²⁶⁾。このように、上記の保守派による一連の研究およびそれに触発された保守派の言論には、冷戦期を通じてアメリカの政治外交をリードしてきた東部リベラル・エスタブリッシュメントに対する党派政治的な利害関心に基づく批判という意図が看取されるといえよう。

ところでヘインズとクレアは、ヴェノナ文書に基づきソ連のスパイ活動が明らかになったことから、冷戦の起源論争に関しても一石を投じている。冷戦の起源／原因／責任論争の系譜に関してごく概略を示せば、“伝統派”（ソ連有責論、1950年代）⇒“修正主義派”（アメリカ有責論、1960年代～1970年代）⇒“ポスト修正主義派”（折衷派、米ソ双方が有責、1980年代以降）という流れがあるが、ヘインズとクレアは、解釈上、伝統派に回帰し、ソ連有責論を唱えた。すなわちソ連は第二次大戦中から対アメリカ諜報活動に極めてアグレッシブな形で従事したことが示したようにアメリカを同盟国というよりはむしろ潜在的な敵国としてみなし、そのようなソ連による敵対的な行動がアメリカ政府のソ連に対する不信感を増大させて態度を硬化させ、その結果、大戦後の冷戦が勃発した、と主張した。また既述のように、ヴェノナ文書によって明らかにされた原爆スパイ活動によってソ連は早期に原爆開発に成功し、原爆という“後ろ盾”を持つことによって、北朝鮮による大韓民国攻撃にゴーサインを出してアジアにおける冷戦の激化に貢献したと主張し、ソ連側に冷戦勃発の大きな責任があることを示唆した。実際、彼らは、「もしソ連が[原爆開発に遅れて]アメリカの核の脅威を受け流すことができなかつたとしたならば、朝鮮半島における両陣営の兵士や一般市民の死傷者を出すことは避けられたかもしれない」と論じている²⁷⁾。このような言説を通じて、この二人の現代史家は、冷戦史やアメリカ現代史そのものの見直しを大胆に提唱したものと言えよう。

IV. リベラル派による対抗言説

では、これらのヴェノナ文書を使用した研究やその著者たちに対して、アメリカ国内のリベラル派知識人／歴史家はどのように反応したのであろうか。ここでは、リベラル派の論壇誌として知られる『ネーション (*The Nation*)』誌や歴史研究に関わる専門雑誌に発表されたヴェノナ文書の価値やヒス裁判、またCPUSAに対する評価などを扱った記事を中心にみていくことにしたい。

リベラル派からはまず、ヴェノナ文書の資料としての価値や利用法に関して疑義が出された。例えば、ローゼンバーグ裁判研究で知られるシナイアー夫妻 (Walter Schneir, Miriam Schneir) は、ヴェノナ文書はソ連の諜報活動に協力したアメリカ人が多数いたことを示していることを認める一方、ヘインズとクレアが主張するほど争う余地のない“確実な証拠”と断定できるのかどうか疑問を投げかけている。つまり、本当に動かしようのない証拠であるならば、なぜ、FBIは1950年代のソ連のスパイをめぐる一連の裁判でヴェノナ作戦の成果に基づく証拠を裁判所に提出しなかつたのか、つまり裁判の証拠として使えるほど確実なものではなく、他の資料との照合による矛盾点の指摘の余地を残すものではないのか、或いは、所詮、断片的な証拠にすぎないの

ではないのか、といった点を指摘した。さらに夫妻はソ連の外交公電で使われた暗号名を実在の人物と照合することの難しさにも言及した。ヴェノナ文書を構成する外交公電は、まずKGBのエージェントとアメリカ人スパイとの英語での会話がロシア語に直され、そのロシア語が暗号化されてモスクワに送られ、さらにそれを、再び暗号解読班が一定の解釈を入れつつ英語に直す、という複雑な過程を経たものであることを指摘し、その過程において、KGB 課員と情報を提供したとされるアメリカ人との間のやり取りがオリジナルなものではなく曲解されて英語に直されている可能性があること、また一人の人物にあてがわれる暗号名は頻繁に変更されていることに鑑みて、実在の人物との照合を容易に許すものとなっていないのではないか、という疑義を表明した。総じて夫妻は、ヘインズとクレアはヴェノナ文書の重要性を過大に評価することを通じてマッカーシー流の“Conspiracy So Immense（陰謀は巨大なり）”に与し、いわばマッカーシズムに対する歴史的審判を修正しようとしているのではないのか、と批判した²⁸⁾。

コロンビア大学大学院ジャーナリズム研究学科教授ナヴァスキー（Victor Navasky）²⁹⁾もシナイアー夫妻と同趣旨の反論を加えている。ナヴァスキーは、ヴェノナ文書によって1930年代後半から1940年代にかけてワシントンを含むアメリカ国内においてソ連のスパイネットワーク網が実際に暗躍していたことが明らかにされたという点は認める一方、ヴェノナ文書から得られる証拠の扱い方をめぐってヘインズとクレアを批判した。つまりナヴァスキーは、この二人の現代史家が解読された通信文にその名が言及されているというだけで349名の人物をソ連のスパイ網の一味と断定しているものの、そのうちの何人かは善意から、或いはそれと知らずに情報を交換していたかもしれないこと、また幾人かは今後の潜在的協力者としてリクルートの対象とされたことからその名が挙げられたかもしれないこと、さらに通信文で使われたコードネームを実在の人物と符合させる際にはより慎重な手続きが必要であること、といった諸点を指摘して、彼らの“独断的主張”は“断片的で、不完全で、文脈から離れ、曖昧な基盤”に基づいていると批判した。ナヴァスキーは、当時のアメリカ社会における“赤の脅威”は、ヘインズやクレアが主張するほどその実大きなものではなかったと主張する一方、「冷戦は終了したかもしれないが、その亡霊 [= 国内反共主義をめぐる論争] は存続し続け、我々に取り憑いている」と述べて、この論争が執拗に継続していることに当惑感を表した³⁰⁾。

マッカーシズムの時代に関する幅広い研究で知られるシュレッカー（Ellen Schrecker）³¹⁾もまた、戦後反共主義の評価をめぐるヘインズとクレアの主張に反論を加えている。例えばシュレッカーは、国内共産主義と反共主義に関する研究史を扱った *Journal of Cold War Studies* 誌に掲載された論考（註17参照）においてヘインズが展開したシュレッカーのCPUSA研究³²⁾に対する批判への反批判を試みている。すなわちシュレッカーは、自分の研究が、ソ連のアメリカ国内における諜報活動とCPUSAとの間の密接な関係や、ソ連の諜報活動がアメリカの国益にもたらした損害を軽視しているというヘインズによる批判³³⁾に反論して、CPUSAの党員から多くのスパイ活動協力者が出たことは認めるものの、ヘインズやクレアが行ってきたような特定の諸個人の“無罪”／“有罪”を確定することに固執する研究は、歴史を白黒の二色しかみない視野狭窄

的なものであると主張した。シュレッカーはこのような「告発を目的とする視座，トーン」を取るのでなく，歴史研究に携わる者は，ハリー・D・ホワイトを初めとするアメリカ人スパイ達の動機や彼らの世界平和や繁栄に関するヴィジョンを形成した大きな知的枠組みを当時の文脈において吟味・検討すべきであると主張した。そしてシュレッカーは，ヘインズらを“我々は今やすべてを知っている”学派と揶揄を込めて呼びつつ，彼らの研究はすでに歴史的事象として過去のものとなった50年前の国内反共主義の意味をめぐる論争を徒に政治的なものにしてしていると批判した³⁴⁾。

さらにシュレッカーは，ヘインズとクレアによる前述の近著 *Spies: The Rise and Fall of the KGB in America*（註17参照）を取り上げた書評論文において，ヴェノナ文書の史資料としての価値に疑問を投げかけた。シュレッカーは，ヴェノナ作戦によって解読された外交公電は「ソ連の〔アメリカ国内における〕諜報活動の程度に関するほとんどの疑いを取り除き」，そしてそれはまた「誰もが疑った以上に大規模なものであった」ことを承認する一方，ヘインズとクレアが，アメリカ人スパイがソ連の諜報機関に与えた「幫助」とは如何なるものであったのか，またアメリカ人スパイによって渡された情報がソ連の外交政策に具体的にどのように利用されたのか，という点に関してはほとんど解明されていないことなどを指摘して，ヴェノナ文書からの断片的な証拠をことさら重視してアメリカの重大な国益が侵されたと主張しているヘインズとクレアを，“勇み足”を踏んでいるとして批判した。加えてシュレッカーは，確かに歴史家が諜報活動に対する道徳的判断を下す自由はあると述べる一方，アメリカの共産主義者がソ連に自発的に協力しようとした事情の解明こそ，歴史家の仕事であるという先の主張を繰り返した³⁵⁾。

このように，リベラル派の知識人／歴史家は，ヴェノナ文書によってソ連のスパイ網が実際に存在し，その中にはCPUSAの党員を初めとするアメリカ人協力者が多数いたことを認めながらも，その史資料としての価値に関しては大きな疑問符を付けていることが見て取れる。確かにナヴァスキーが批判的に分析したように，外交公電の中で名前が挙げられている人物の正体については100%確実であると言えないケースもあり，また照合作業の結果，コードネームと実在の人物が一致して特定されたとしても，それは，在米のKGBのエージェントがアメリカ人のリクルートの成功をモスクワの上司に強調するために“協力者”として名前を挙げたのかもしれない可能性も捨てきれないと言えよう。さらに，シュレッカーが強調するように，ソ連のスパイ協力者として特定されたアメリカ人を単に“裏切り者”扱いするだけでなく，なぜこれらの人物がソ連側と通じたのか，その動機に関して解明することも歴史家の重要な仕事であるといえよう。私見では，ヴェノナ文書の資料的価値の限界は，ソ連政府がアメリカ人協力者から渡された機密文書を具体的にどのようにその外交政策に利用したのか（その結果，どの程度，アメリカ外交に損益を与えたのか）という点については，原爆スパイケースを除いてほとんど何も語っていないことに存するように思われる。この点に関してヘインズとクレアは「ソ連のスパイによって集められた情報の実際の具体的内容やアメリカの国益に与えた損害は明らかではない」ことを認める一方，続けて「その損害は重大なものであることは，控えめに言っても十分に明らかである」と述

べるに留まっている³⁶⁾。しかし、このような曖昧さの印象を与える言い方は、ヘインズやクレアが主張するほどヴェノナ文書の史資料的価値は高くないことをその批判者に疑わせるのに十分なものになっていると言えよう。

次に前述したマッカーシー及びマッカーシズムを擁護した保守派の研究に対するリベラル派からの批判について検討してみたい。例えばヴェノナの公開によって、“マッカーシーの告発は、基本的に正しかった”という言論が保守派勢力から出ていることを評して、『ニューヨーク・タイムズ』紙はその社説で、このような再評価は、歴史の書き換えを装った保守イデオロギーの一つの表現であるという評価を下した。同社説は、たとえ冷戦初期に共産主義者およびそのシンパによるスパイたちが暗躍していたとしても、マッカーシーは事実を捏造する性向を持ったデマゴグであったことに変わりはなく、当時の反共ヒステリアを引き起こした張本人であること、そしてこの人物の扇動的な反共キャンペーンによって、何百人ものアメリカ人の市民的自由とキャリアが破壊されたことなどを指摘した。同社説は結びとして、マッカーシーは、アメリカの民主主義／アメリカの政体にとって、“破滅的な脅威”であったと断じ、マッカーシーおよびマッカーシズム再評価の動向に警鐘を鳴らした³⁷⁾。

また、ジャーナリストのJ. マーシャル (Josh Marshall) は、ハーマンらの研究に代表されるマッカーシー再評価の動きを、“マッカーシー修正主義 (McCarthy Revisionism)” さらには“新マッカーシズム (New McCarthyism)” と極めて強い言辞を用いて非難した。彼の見解では、その真の目的は、保守主義のアジェンダを推進する党派政治戦略にあった。すなわち、このような“歴史修正主義”は、冷戦リベラリズム、民主党、左翼、ニューディールの社会政策を政治的に攻撃することであり、さらに1950年代の“赤狩り”と同じ手法を用いて、今日のリベラルな国際主義に基づく外交政策を攻撃することを意図していると分析した。マーシャルによれば、マッカーシーを再評価する研究では、当時のF・ローズヴェルト／トルーマン両民主党政権が国内の共産主義者にあまりも無防備であったという見解がしばしば示されているものの、事実はトルーマン大統領を含む当時の反共リベラルこそ、共産主義の脅威を十分認識して、国内では忠誠審査プログラムの実施、国外ではマーシャルプランの実施やNATOの設立などの有効な対共産主義抗策を講じて共産主義の勢力の封じ込めを成功させた張本人たちであり、彼らが共産主義に弱腰であった言う批判は御門違いであった。さらにマーシャルは、当時のクリントン政権時代の“チャイナゲート”事件（クリントン政権下の民主党が、中国政府に近い中国系アメリカ人に、選挙資金援助の見返りとしてミサイルテクノロジーを売り渡したという疑惑）において、ニュート・ギングリッチ (Newt Gingrich) を含む共和党保守派が、この行為は“国益を裏切る行為”或いは“反逆罪”であるという非難を行っていることに触れ、このような誇張された言辞はマッカーシー流告発の現代版であり、マッカーシーを再評価する“新しいマッカーシー主義者”たちと同類である、と批判した³⁸⁾。

最後に、マッカーシーの伝記の著者でピューリッツァー賞受賞歴もあるアメリカ現代史家オシンスキー (David Oshinsky)³⁹⁾ によるエヴァンズの著作 (*Black Listed in History*, [註22参照])

に対する書評を紹介することにした。オシンスキーは『ニューヨーク・タイムズ』紙に掲載された書評において、エヴァンズの基本的な主張、すなわち1950年代初頭にマッカーシーが国内共産主義の脅威を声高に叫んで“中国喪失”の責任をトルーマン政権の高官たちの“陰謀”に求めたことは正しい行いであり、この人物はアメリカの国益を勇敢に守った、という主張は歴史的评价として吟味に耐えないと批判した。つまりマッカーシーが登場した1950年代初頭には、すでにトルーマン政権による連邦政府職員を対象とする忠誠審査プログラムなどによって十分な対抗措置が取られていた一方、マッカーシーはその無鉄砲かつセンセーショナルな告発を通じて「共産主義に対する重要な対抗策を政治的泥沼に引き込んだ遅れてやってきた者」であり、この人物に国内共産主義の脅威に警鐘を鳴らした功績を帰すことはできないと述べた。さらにオシンスキーは、エヴァンズが自著でヴェノナ文書を含む新しい資料を発見して用いたと誇らしげに述べている点に言及し、その実、これらの資料は何ら新しいものではなく、すでに多くの歴史家が資料として十分に使いこなしている点を指摘した。最後にオシンスキーは、エヴァンズがその著作で意図したマッカーシーの名誉の復権については、合衆国上院で譴責決議を受ける直前にマッカーシー自身が茫然自失のうちに残した言葉、すなわち「そのようなことは前代未聞である」を引用して、皮肉を込めて一蹴した⁴⁰⁾。

V. ヴェノナ文書をめぐる論争に見る現代アメリカの政治文化

この節では、ヴェノナ文書公開後、アメリカ現代史家を含む知識人の間で極めて党派政治化される形で行われてきたCPUSA研究やマッカーシズムを含む国内反共主義研究をめぐる論争を、ポスト冷戦期のアメリカの政治文化の状況一般という文脈の下に置きながら、若干の分析と考察を及ぼしてみたい。

これまで検討してきたように、ポスト冷戦期に起こった戦後アメリカにおける反共主義の評価をめぐるのは、“ソ連のスパイ網は実際に暗躍したことは確かであるが、それよりもマッカーシズムの方がより悪である”というリベラル派の立場と、“ソ連のスパイ網の暗躍は予想を超えるものがあり、民主党政権がその対応を誤ったが故に、マッカーシーが登場し、少なくともその主張／目標には十分な正当性がある”という対極的な二つの見解が衝突していることが見て取れる。この論争を大きな知的文脈においてみるならば、ポスト冷戦期におけるリベラルと保守の間のイデオロギー上の分極化をそのまま映し出していると言えよう。そこでこの点に関するリベラル派と保守派の双方の“言い分”を手掛かりとして、ポスト冷戦期のアメリカの政治文化の現況に関して検討することにした。

前述したナヴァスキューは、ヴェノナ文書公開以後に保守派によって提出された当時の国内反共主義を正当化する言説を「冷戦メンタリティー」の復活との関連で捉え、それはCPUSAであろうがそのシンパであろうが「内なる他者」によるアメリカ政体の転覆の脅威を強調するアメリカ史の中でしばしば登場する“カウンターサブヴァーシブ（countersubversive）的伝統”と密接な親近性を持っていると論じた。またナヴァスキューは、ヴェノナ文書による証拠をめぐる論争には

1990年代の政治的雰囲気、すなわちクリントン民主党政権に対する共和党保守派のフラストレーションに加え、世界唯一の超大国となったアメリカの「勝利主義（“triumphalism”）」、つまり保守派が“共産主義の罪”を暴くことに喜びを見出し、またその裏返しとして“西側諸国の道徳的優越性”を喧伝するメンタリティー、これらが関係しているのではないかと示唆している。そしてナヴァスキーは、たとえヒスらの有罪が確証されたとしても、アメリカは国内の共産主義者によって、例えば東欧諸国が共産主義者によって政権を奪取されたのと同じような意味で内部からその安全保障が脅かされていた訳ではなく、彼らの主張は現実の脅威の冷静な判断に基づくものというよりも、被害妄想的な心性に基づくものであると批判した⁴¹⁾。

またシュレッカーの場合も、ヘインズらの研究を扱った既述の書評論文の中で、第二次大戦後の反共主義の大義を正当化する研究が活況を呈している点に関して、現在の視点から論評を加えている。シュレッカーは50年前のソ連の諜報活動やマッカーシズムをめぐる論争がアメリカ国内で蒸し返されていることに「とまどいを感じている」と述べつつ、それは“愛国主義”と“個人の自由”、“安全保障”と“プライバシー”をめぐる現下の論争のいわば代用物になっているのではないかという推論を行っている。つまりそれは近年におけるG.W.ブッシュ政権下の「愛国者法（USA Patriot Act）」（2001）を初めとする国内向けの対テロ対策によって惹起された国家権力による“内なる他者”に対する監視活動と個人のプライバシーや信条の自由を含む市民的自由の保護を巡るリベラル派と保守派の間の論争のいわば鏡像になっているのではないのか、と憶測している⁴²⁾。

このようなリベラル派知識人からの批判に対しては、保守派知識人はもちろん反論を行っている。例えばヘインズは、保守派は、確かに冷戦の勝利やソ連の崩壊を歓迎している一方、別に冷戦後の「勝利主義」に浸っているわけではなく、何よりも20世紀に共産主義イデオロギーがもたらした破壊的な災厄——市民的自由を奪う抑圧体制、強制収容所、スターリン裁判による粛清など——に関して冷静に歴史的研究を行うことに関心がある、と主張した。またヘインズは、リベラル派の歴史家たちは、その社会的・知的出自によって左翼イデオロギーに影響されながら知的形成を行っており、またその感情的および知的エネルギーの双方を左翼研究に投資してきたので、CPUSAやソ連の諜報活動が呈した脅威の現実を理解していないと難詰した。加えてリベラル派の知識人／歴史家は、アメリカ国内やソ連の新しい資料を検討するという骨の折れる作業をすることなしに、CPUSAが組織的にソ連の諜報活動を幫助したことを暴いた歴史家を「攻撃することに没頭」していると非難した。そして、彼らはCPUSAの党員や共産主義シンパを、“社会的正義”や“大衆のためのよりよい世界の創造”に寄与したというロマンチックな見方から脱することが未だに出来ない結果、真の悪は共産主義ではなくマッカーシズムであるという本末転倒の議論をしている、と手厳しく批判した⁴³⁾。

さらにまたヘインズとクレアは、国内のリベラルな歴史家・歴史学会にもその批判の矛先を向けている。すなわち、彼らによれば“歴史学会のエスタブリッシュメント”は国内共産主義を巡る学術的論争をこれまで“黙殺”してきており、その証拠として、従来、アメリカ歴史学会、ア

アメリカ史学会が各々の機関誌 *American Historical Review* や *Journal of American History* において、進歩的改革政党としての CPUSA を肯定的に評価する論考を多数掲載してきた一方、ソ連の手先であった CPUSA を否定的に描いた論考は全くといってよほど掲載してこなかったと述べて批判した。また既述の CPUSA 研究を著したりベラル派の大物歴史家フォナーを批判するにあたっては、彼が CPUSA 元党員を親に持つ左翼知識人であると同時にアメリカ歴史学会、アメリカ史学会双方の会長に選任された歴史学会のエリートであることを指摘するなど、やや感情的とも取れる批判を行っている⁴⁴⁾。

このようにこの論争は、アメリカ歴史学会やジャーナリズムの世界における“エスタブリッシュメント”，すなわち東部の名門大学で学位や教鞭を取り、思想的にはリベラル乃至はリベラル左派の立場を取る知的エリート層と、かれらとは距離を置く新興の保守的な歴史家／ジャーナリストとの間の感情論すれすれの論争という性格を帯びるに至っていると言えよう。ここで、やや穿った見方をすれば、この論争は、1950年代に当時のアメリカを代表する社会学者が提出したマッカーシズムをめぐるアメリカ国内の社会勢力間の対立の構図、すなわち東部を中心とするリベラルーエスタブリッシュメントに対する保守の立場を取る中西部や南部のカトリック教徒を中心とする新旧中産階級の異議申し立て、と奇しくも同型の構造を示しているとも言えるように思われる⁴⁵⁾。

おわりに

本稿で検討したように、半世紀以上前の冷戦初期の国内反共主義やソ連の諜報活動とアメリカ人スパイを扱った諸研究を巡るリベラルー保守の角逐に基づく論争がこのようにホットに行われている背景には、今日のアメリカの政治文化的状況、とくに9/11後の国家安全保障とテロリズムの脅威との関係をめぐる国内の論争、つまり「愛国者法」に象徴される「内なる他者の呈する脅威」への対処を旨とする対テロ法とそれに対するリベラル派の反発があると言えよう。そこで問題になっているのは、国家安全保障の名における行政権力（NSA, FBI等）の増大とそれにもなうプライバシーや市民的自由の侵害、機密保持の必要性和国民の知る権利といった点であり、これらの問題をめぐる保守派とリベラル派の間の見解の相違が、アメリカ市民や外国人を対象とする対諜報活動の過去の歴史的事例をめぐる論争にもその影を落としているように思われる。その意味で、冷戦初期の国内政治状況とある程度、相似の関係がみられるとも言えよう。

さらにこの論争を、アメリカ史全体の流れの文脈においてみると、そこにはアメリカの政治文化の“通奏低音”も聞き取れると言えよう。ここで言うアメリカの政治文化の“通奏低音”とは、国家利益に対する意図的な陰謀／裏切り、国家への不忠誠や愛国心の欠如といった動機をことさら強調して責任追及する政治文化、換言すれば国内の“敵”が体制転覆を図る“陰謀”を画策する“裏切り者”として表象され、それを徹底的に弾圧する政治的なマインドセットを指す⁴⁶⁾。実際、アメリカ史を遡れば、すでに建国初期の1798年に「外国人・治安諸法（Alien and Sedition Law）」が制定され、国内の“敵”を弾圧する法律が施行されている。また第一次世界大戦後も、

「外国人法 (Alien Act)」や「スパイ法 (Espionage Act)」が制定され、急進的労働組合運動や無政府主義者の取り締まり／強制送還が行われている。そしてその際には、国家安全保障上の必要性と憲法で保証された個人の権利や市民的自由の間の緊張関係をめぐって、国内で激しい議論が巻き起こっている。いずれにせよ、ポスト冷戦期に入り、共産主義がイデオロギーとしても、そのイデオロギーを具現した現実の国家や政党という側面においても脅威を呈しているともはや言えない状況において、反共主義が有力な「政治的象徴」であり続け、特に保守／右翼勢力が、伝統的エスタブリッシュメントを政治的に攻撃する際に好んで武器として用いられている状況が依然としてみられる点は注目に値しよう⁴⁷⁾。

この間の事情に関して、オシンスキーは以下のような正鵠を射た評言を行っている。

「これらのことは、不安な時代における安全保障に関する正当な懸念が如何に党派的、抑圧的、そして呵責のないものへと変貌するかを物語っている。…マッカーシーが闘志となって告発した陰謀——強力なエリートたちの不忠誠——は、アメリカの建国期にまで遡るが故に、国民の非主流派集団の中に共鳴者を見出し続けることであろう⁴⁸⁾。」

この指摘にみられるように、今日のような国内外のテロとの戦いが継続している“不安な時代”の最中にあるアメリカでは、国内反共主義や旧ソ連のスパイ活動をめぐる論争に、アメリカ史の中で繰り返し現れる“巨大な陰謀説”を信じる政治的信条／心情が忍び込み、その結果、論争が極めて党派政治化された形で行われることに結びついていることを見て取ることが出来よう。

[註]

- 1) Venona 文書の公開は、1998 年まで続いた。公開されたヴェノナ文書は、現在でも NSA のウェブ・サイトで閲覧することが出来る。See the agency's website, <http://www.nsa.gov/public_info/declass/venona/dated.shtml>. また、解読された外交公電を集めた資料集として、Robert Louis Benson and Michael Warner, eds., *Venona: Soviet Espionage and the American Response 1939-1957* (Washington, D.C.: National Security Agency and Central Intelligence Agency, 1996) を参照。なお、編者のロバート・L・ベンソンは NSA の職員。
- 2) Robert L. Benson, *The Venona Story* (Center For Cryptologic History, NSA, n.d.) <http://www.nsa.gov/about/_files/cryptologic_heritage/publications/coldwar/venona_story.pdf> [available on the Internet], 1-6, 10-16.
- 3) Ibid., 11-20. 尚、1948 年からは、英国の情報機関もヴェノナ作戦に参加している。
- 4) ニューヨーク州選出の上院議員であったモイニハン議員 (1927-2003) は、1960 年代にはケネディ／ジョンソン政権下の労働次官補として社会福祉政策の立案に与った。また社会学者としても知られ、邦訳もあるネイサン・グレーザーとの共著 *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians, and Irish of New York City* (Cambridge, Mass.: MIT Press, 1963) や、都市部における黒人の失業と黒人家庭の崩壊の関係について社会科学的手法を用いて分析した “The Negro Family: The Case For National Action” (1964) (通称 “モイニハン・レポート”) の

著者でもあった。

- 5) The Commission on Protecting and Reducing Government Secrecy (Moynihan Commission on Government Secrecy), *Report of the Commission on Protecting and Reducing Government Secrecy* (1997) <<http://www.fas.org/sgp/library/Moynihan/appa7.html>>
- 6) John Lowenthal, "Venona and Alger Hiss," *Intelligence and National Security*, Vol. 15, No. 3 (Autumn 2000), 6. モイニハンと彼の委員会の活動内容およびヴェノナ文書公開の経緯に関しては, Richard Gid Powers, "Introduction," in Daniel Patrick Moynihan, *Secrecy: The American Experience* (New Haven: Yale University Press, 1998), 1-58.
- 7) Moynihan, *Secrecy: The American Experience*, 59-75.
- 8) *Ibid.*, 15-17.
- 9) Benson, *The Venona Story*, 18.
- 10) John Earl Haynes and Harvey Klehr, *Venona: Decoding Soviet Espionage in America* (New Haven: Yale University Press, 1999), 339-370. [邦訳: 中西輝政 (監訳) 『ヴェノナ解読されたソ連の暗号とスパイ活動』 (PHP, 2010年)]
- 11) ジョン・E・ヘインズ (ミネソタ大学 Ph.D.) はアメリカ政治史が専門の歴史家で, アメリカ議会図書館調査員を務めている。ハーベイ・クレア (ノースカロライナ大学チャペルヒル校 Ph.D.) はエモリー大学歴史学部教授で, ヘインズ同様, アメリカ政治史を専門としている。
- 12) これらの人物の経歴, また彼らが属していたスパイネットワーク網の詳細な分析に関しては, Haynes and Khler, *Venona*, 129-150.
- 13) ヒスはこの裁判中一貫して無罪を主張し, 判決後も再審請求するなど法廷闘争をつづけ, 結局1992年に無罪判決を勝ち取っている。ヒス裁判に関しては, Allen Weinstein, *Perjury: Hiss-Chambers Case* (New York: Random House, 1997). この著書において, ワインスタインは, ヴェノナ文書からの証拠も引用しつつ, ヒスがチェンバースの証言通り, ソ連の協力者であったと結論付けている。なお, ここで, 筆者の長年の研究テーマで, "赤狩り" 時代, 共産党員の潜入を許した組織として上院司法委員会国内治安小委員会 (通称マッカラン委員会) で告発された極東地域の政治経済問題を討議/研究する国際主義的民間団体であった太平洋問題調査会 (The Institute of Pacific Relations, IPR) の活動とこれらの人物たちの関係に関して説明しておきたい。ホワイトを除いて, 彼らがIPRの活動に一時的にせよ参加していたのは事実であった。まずフランク・コーに関しては, IPR主催の民間有識者を集めて戦後1942年モン・トランプラン会議および1945年ホット・スプリングス会議に米国代表団の一員として参加しており, またローズヴェルト大統領の補佐官の一人であったロークリン・カリーの場合は, モントランンプラン会議の際にアメリカ代表団の人選にあたってIPR関係者と連絡を密に取って助言を行い, 自らもこのアメリカ代表団の一員としてこの会議に出席している。アルジャー・ヒスに関しては, 彼が1930年代末から40年代にかけて国務省極東課のチーフであったスタンレー・ホーンベック (Stanley K. Hornbeck, IPRが主催した1925年および1927年のハワイ会議, 1942年モン・トランプラン会議に出席) の副官時代にIPR関係者と国務省関係者の連絡する際の"橋渡し役" を務めていた。またヒスは, 1948年から1949年の間, アメリカIPRの理事の一人を務めた。この時期に国際IPR事務総長を務めていたエドワード・C・カーター (Edward C. Carter) は, これらの人物と個人的に旧知の間柄であり, 上記のIPR主催の国際会議のアメリカ代表団を選定する際には, 彼らと頻りに接触しつつ, その助言を請うていた。これらの人物のIPRの活動における役割については, Yutaka Sasaki, "The Struggle for Scholarly Objectivity: The Institute of Pacific Relations and Unofficial Diplomacy from the Sino-Japanese War to the McCarthy Era (Ph.D. dissertation, Rutgers University, 2005); *idem.*, "Comments on Prof. Hooper's 'Recollections'" in Yamaoka Michio, et.al., *International Symposium*

- on McCarthyism and the Institute of Pacific Relations* (Waseda Institute for the Study of the Institute of Pacific Relations, 2011), 17-23.
- 14) ヤルタ会談に米代表団として参加した随行員の中で、会談終了後モスクワを訪れたのは、ヒスだけであることが確証されている。但し、この公電からは、ソ連側にヒスからどのような情報もたらされたかに関しては知ることはできない。
 - 15) 例えば、Walter Schneur, *Invitation to an Inquest* (New York: Del Pub. Co, 1965); Ronald Radosh, Joyce Milton, *The Rosenberg File: A Search for Truth* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1983).
 - 16) Harvey and Klehr, *Venona*, 123.
 - 17) ヘインズとクレア、およびその協力者（共同執筆者）の代表的研究としては以下を参照。Harvey Klehr, John Earl Haynes, *The Secret World of American Communism* (New Haven: Yale University Press, 1995); idem. and K.M. Anderson, eds., *The Soviet World of American Communism* (New Haven: Yale University Press, 1998); idem and Alexander Vassilef, *Spies: The Rise and Fall of the KGB in America* (New Haven: Yale University Press, 2009). なお、ヘインズとクレアは国内反共主義およびアメリカ共産党に関する研究史を回顧／展望したレビュー・エッセイを何本か執筆している。John Earl Haynes, "The Cold War Debate Continues: A Traditionalist View of Historical Writing on Domestic Communism and Anti-Communism," *Journal of Cold War Studies*, Vol. 2, No. 1 (Winter 2000), 76-115; John Earl Haynes and Harvey Klehr, "The Historiography of Soviet Espionage and American Communism: From Separate to Converging Paths," Paper delivered at International Communism and Espionage Session, European Social Science History Conference, Amsterdam, Netherlands (March 2006).
 - 18) Maurice Isserman, *Which Side Were You On? The American Communist Party during the Second World War* (Middletown, Conn.; Wesleyan University Press, 1982). この時点までのアメリカ共産党研究史に関しては、Kenneth Walzer, "The New History of American Communism", *Reviews in American History* Vol. 11, No. 2. (June 1983), 259-267; Maurice Isserman, "Three Generations: Historians View American Communism," *Labor History*, Vol. 26, No. 4 (Fall 1985) を参照。
 - 19) Eric Foner, *The Story of American Freedom* (New York: W.W. Norton, 1998).
 - 20) Harvey and Klehr, *The Secret World of American Communism*, *passim*; idem, *The Soviet World of American Communism*, *passim*; idem, *Venona*, 287-330, 332-333.
 - 21) Arthur Herman, *Joseph McCarthy: Reexamining the Life and Legacy of America's Most Hated Senator* (New York: the Free Press, 2000).
 - 22) M. Stanton Evans, *Blacklisted by History: The Untold Story of Senator Joe McCarthy and his Fight Against America's Enemies* (New York: Three Rivers Press, 2007). なお、ラティモアは前述したIPR（註13参照）の機関誌『パシフィック・アフェアズ (*Pacific Affairs*)』の編集長を1930年代に務め、またジェサップの場合は米国IPR委員長や国際IPR理事長を務めるなど、両者ともこの民間団体の活動に深く関わっていた。但しここで注意すべきはラティモア、ジェサップとも、ヴェノナ文書の中では全く言及されていない点である。管見では、この二人の政治的立場は、ラティモアはアジアの民衆派の立場に立つリベラル左派、ジェサップの場合は主流派リベラルであった。
 - 23) William Buckley, *McCarthy and His Enemies: The Record and Its Meaning* (Chicago: Henry Regency Company, 1954).
 - 24) Daniel J. Flynn, "The Hidden Truth About Joseph McCarthy," *Accuracy in Academia* (January 2000).
 - 25) Pat Buchanan, "When the right was right," *Townhall*, May 12, 2003.
 - 26) Ann Coulter, *Treason: Liberal Treachery from the Cold War to the War on Terrorism* (New York:

Crown Forum, 2003) [邦訳『リベラルたちの背信——アメリカを誤らせた民主党の60年』栗原百代(訳)(草思社, 2004年)]。なお、ヘインズとクレアは、マッカーシー上院議員が行った反共キャンペーンに対しては、必ずしも肯定的な評価を行っているわけではなく、当時の「国内反共主義」全般に対してはその正当性を認める一方、「マッカーシズム」に対してはその行き過ぎを認めている。

- 27) Haynes and Klehr, *Venona*, 11, 333.
- 28) Walter Schneir and Miriam Schneir, “Cables Coming in from the Cold” *The Nation* (August 21, 1995). この論考の中でシナイアー夫妻は、1950年代中葉の時点で、当時のFBI長官(Alan H. Belmont)自身が、ヴェノナ通信文を裁判で使用することに反対した事実も指摘している。
- 29) ヴィクター・ナヴァスキー(ABスワスマア大学、イエール法律大学院)は『ネーション』誌編集長および論説主幹を1978年から2005年まで務めた。ハリウッド映画界における共産主義の浸透をめぐる非米活動委員会による調査活動を論じた *Naming Names* (New York: Viking, 1980) 等の著作を著している。
- 30) Victor Navasky, “Cold War Ghost,” *The Nation* (June 2001).
- 31) エレン・シュレッカー(ABラドクリフ大学、Ph.D.ハーバード大学)は、ニューヨークにあるイエシバ大学歴史学部教授を務めている。マッカーシズムの時代の政治社会／政治／文化的状況に関する幅広い研究で知られ、著書に *No Ivory Tower: McCarthyism and the Universities* (New York: Oxford University Press, 1986), *Cold War Triumphalism: Exposing the Misuse of History after the Fall of Communism* (New York: New Press, 2004) などがある。
- 32) Ellen Schrecker, *Many Are the Crimes: McCarthyism in America* (Boston: Little Brown, 1998).
- 33) Haynes, “The Cold War Debate Continues,” 103-105, 107-113.
- 34) Ellen Schrecker, “Comments on John Haynes,” *The Journal of Cold War Studies*, Vol. 2, No. 1 (Winter 2000).
- 35) Ellen Schrecker, “Soviet Espionage in America: An Oft-Told tale.” *Reviews in American History*, Volume 38, No. 2 (June 2010), 355-361.
- 36) Haynes and Klehr, *Venona*, 332.
- 37) “Revisionist McCarthyism (editorial)” *New York Times*, Oct. 23, 1998.
- 38) Josh Marshall, “Exhuming McCarthy” *American Prospect* (December 2001)
- 39) オシンスキー(ABコーネル大学、Ph.D. ブランダイス大学)は、最もスタンダードなマッカーシーの伝記的研究として知られる *“A Conspiracy So Immense”: The World of Joe McCarthy* (New York: Free Press, 1983) を著している。また、*Polio: An American Story* (New York: Oxford University Press, 2005) でピューリッツァー賞(ノンフィクション部門)を受賞している。現在はテキサス大学オースティン校歴史学部教授(the Jack S. Blanton Chair in history)であるが、前任校のラトガース大学歴史学部では筆者の指導教授であった。
- 40) David Oshinsky “In the Heart of the Heart of Conspiracy,” *The New York Times* (January 27, 2008). なお、興味深いことに、エヴァンズの著作は、一部の保守主義者からもオシンスキーと同趣旨の批判に晒されている。例えば、前マルキスト、転じて現在はネオ・コンサヴァティズムの知識人の一人として知られる歴史家R.ラドッシュ(Ron Radosh)は、エヴァンズの著作は、マッカーシーの伝記というよりも、彼の言動すべてを擁護しようとする弁護士の訴訟事件摘要書のようなものであると述べつつ、すでにマッカーシーが登場する以前に、国内共産主義者のスパイ網の存在や脅威はFBI等によって知られており、国内共産主義の脅威に対する告発の功績を主張するようにマッカーシーに帰すことは出来ないことを指摘した。またエヴァンズは、マッカーシーが攻撃したラティモアやジェサップを確かな証拠を示さずに(或いは、わずかな“証拠”を曲解して)共産主義者シンパとして描き、彼らこそアメリカの極東政策を

共産主義に有利な方向に結びつけた元凶と断定していることにも言及し、これは検証に耐える主張とは言えないと述べた。そしてラドッシュは、無実の人々に対するマッカーシーの無謀な告発が、むしろ本物のスパイをして「自分たちも“魔女狩り”の犠牲者である」と主張することを可能にしたと主張した。Ron Radosh, “What Conservatives need to Know About Joe McCarthy,” *National Review* (September 30, 2009).

- 41) Navasky, “Cold War Ghost”.
- 42) Schrecker, “Soviet Espionage in America,” 360-361.
- 43) Haynes, “The Cold War Debate Continues,” 114-115.
- 44) John Earl Haynes and Harvey Klehr, *In Denial: Historians, Communism & Espionage* (San Francisco: Encounter Books, 2003), 38-40, 77-80.
- 45) Daniel Bell, ed., *The New American Right* (New York: Criterion Books, 1955) [邦訳]：齊藤真／泉昌一（訳）『保守と反動』（みすず書房，1958年）。
- 46) Richard Hofstadter, *The Paranoid Style in American Politics and Other Essays* (New York: Alfred A. Knopf, 1965).
- 47) 国内政治における“政治的象徴のインフレ”としての反共主義の意味合いの分析に関しては、古矢旬『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナリズム』（東大出版会，2002年），225-288.
- 48) Oshinsky, “In the Heart of the Heart of Conspiracy.”

資料1

89. Washington 1822 to Moscow, 30 March 1945.

~~TOP SECRET~~ [REDACTED] VENONA

MEB

From: WASHINGTON

To: MOSCOW

No: 1822

30 March 1945

Further to our telegram No. 283[2]. As a result of "[D% A.'s]"[1] chat with "ALES"[11] the following has been ascertained:

1. ALES has been working with the NEIGHBORS[SOSEDI][111] continuously since 1935.
2. For some years past he has been the leader of a small group of the NEIGHBORS' probationers[STAZHERY], for the most part consisting of his relations.
3. The group and ALES himself work on obtaining military information only. Materials on the "BANK"[1v] allegedly interest the NEIGHBORS very little and he does not produce them regularly.
4. All the last few years ALES has been working with "POL"[v] who also meets other members of the group occasionally.
5. Recently ALES and his whole group were awarded Soviet decorations.
6. After the YALTA Conference, when he had gone on to MOSCOW, a Soviet personage in a very responsible position (ALES gave to understand that it was Comrade VYSHINSKIJ) allegedly got in touch with ALES and at the behest of the Military NEIGHBORS passed on to him their gratitude and so on.

No. 431 VADIM[v1]

Notes: [a] Not available.

Comments:

[1] A.: "A." seems the most likely garble here although "A." has not been confirmed elsewhere in the WASHINGTON traffic.

[11] ALES: Probably Alger HISS.

[111] SOSEDI: Members of another Soviet Intelligence organization, here probably the GRU.

[1v] BANK: The U.S. State Department.

[v] POL: i.e. "PAUL," unidentified cover-name.

[v1] VADIM: Anatoliy Borisovich GROMOV, MEB resident in WASHINGTON.

8 August 1969

~~TOP SECRET~~ [REDACTED] VENONA

Source: Robert Louis Benson, Michael Warner, eds. *Venona: Soviet Espionage and the American Response 1939-1957* (Washington, D.C.: National Security Agency, 1996), 423.

資料2

75. New York 1715 to Moscow, 5 December 1944.

~~TOP SECRET~~ VENONA

Reissue (T9.3)

From: NEW YORK
To: MOSCOW
No: 1715

5 December 1944

To VIKTOR[i].

Expedite consent to the joint filming of their materials by both METR[i] and Kh'YuS[iii] (see our letter no. 8). LIBERAL[iv] has on hand eight people plus the filming of materials. The state of LIBERAL's health is nothing splendid. We are afraid of putting LIBERAL out of action with overwork.

No. 943.

Your no. 5673[a]. DIK[v] is directly in touch with FLOKS's [vi] husband and not with FLOKS herself. The intention of sending the husband to see RAMSEY [RAMZAJ][vii] is explained by [C] the possibility of avoiding a superfluous stage for transmitting instructions.

No. 944

ANTON[viii]

Your no. 5598[a]. The sending of passengers on Liberty ships from TYRE[TIR][ix] to Soviet Northern ports has become exceptionally difficult. They can only be sent to England to await there a ship headed for the Soviet North.

No. 945

MAJ[x]

4 December

Notes: [a] Not available.

Comments:

- [i] VIKTOR: Lt. Gen. P. M. FITIN.
- [ii] METR: i.e. METER, probably either Alfred SARANT or Joel BARR.
- [iii] Kh'YuS: i.e. HUGHES, probably either Joel BARR or Alfred SARANT.
- [iv] LIBERAL: Julius ROSENBERG.
- [v] DIK: i.e. DICK, Bernard SCHUSTER.
- [vi] FLOKS: i.e. PHLOX, probably [redacted] See NEW YORK's Nos. 619 of 4 May 1944 and 1020 of 20 July 1944.
- [vii] RAMZAJ: Possibly [redacted]
- [viii] ANTON: Leonid KNASNIROV.
- [ix] TIR: NEW YORK CITY.
- [x] MAJ: i.e. MAY, Stepan APRESYAN.

1 May 1975

~~TOP SECRET~~ VENONA

②を挿入

Source: Robert Louis Benson, Michael Warner, eds. *Venona: Soviet Espionage and the American Response 1939-1957* (Washington, D.C.: National Security Agency, 1996), 385.